自我体験と素朴理論の関連についての理論的概観と予備的検討

A Theoretical Overview of the Relationship between “Ego-experience” and Folk Psychology and the Use of a Preliminary Questionnaire

天　谷　祐　子
Yuko AMAYA

キーワード：自我体験、素朴心理学、心身問題
Key words：ego-experience, folk psychology, mind-body problem

要約

本論文は自我体験と素朴理論の関連を２つの観点から述べることを目的としている。第１の観点は、両者の関連を理論的に概観することである。ここで言う素朴理論とは、「心身問題」に関わる素朴な考え方－心身と「私」に関する考え方－のことをさしている。本論文において、素朴理論における既存の素朴生物学または素朴心理学の研究の流れの中に、心身問題に関わる素朴な考え方を新たに位置づける。その後、この心身問題と私に関わる考え方の発生や変化の過程に、自我体験が寄与しているという仮説を提起する。これにより、現在までの一連の自我体験に関する研究を、多くの研究の蓄積が見られる素朴理論研究の流れの中で捉えることにより、新たに得られる知見の可能性や新たに提起される研究の方法、それらの有用性と今後の展望が開けると考えられる。第２の観点は、心身と私に関する考え方についての質問項目を作成し、自我体験との関連を調べるものである。その結果、身体優位の自己規定、意識優位の自己規定の２因子が見出され、自我体験を経た深刻さや意味づけとの関連が示された。

Abstract

This study had two purposes in exploring the relationship between “ego-experience” and folk psychology. The first was a theoretical overview of the relationship between “ego-experience” and folk psychology; it examined “ego-experience” in the context of the formation of or changes in children’s folk psychology. The second purpose was to confirm the relationship between “ego-experience” and the outlook on mind-body-self in folk psychology through the use of a preliminary questionnaire. The new questionnaire on the outlook on mind-body-self was based on the knowledge derived from the

theoretical overview for this study. As a result, the questionnaire had two factors, one named “self-prescription from body predominance,” and the other named “self-prescript ion from consciousness predominance.” Both factors referred to the seriousness or the meaningfulness of the respondents’ “ego-experiences.”

Ⅰ．心身－私観の提起

1．自我体験と心身－私観

児童期後半から青年期初期にかけて約半数の人に「私はなぜ私なのか」、「私はなぜ他の時代ではなくこの時代に生まれたのか」といった問い－自我体験－が出現することが天谷(2002, 2004)による実証的調査により明らかにされている。天谷(2002)では、ここで問われている「私」について、心理学で主に問題とされている自己意識や自己概念とは異なり、「その人の属性や身体といった諸規定からなる具体的に現在ある個人としての「私」とは独立したもの」として「私１」と提起している。この「私１」に対する問いかけを自我体験と定義しているが(天谷,2002)、この「私１」という考え方が含まれている自我体験の事例を、天谷(2002)では中学生から面接法により収集している。その中の代表的な事例(中学２年男子の報告)として“他の子の世界、見える世界があるだろうし、だから何でそれが、たまたま自分じゃないですか。この世界が。だから、他の子である可能性も、あるような気もしないでもない、で何で自分なんだろう･･･（中略）この体を選んだ、選んだのかどうかはわからないんですけど、この体と気持ちが合わさっているから、何でそれがこれだったんだろう。”というものが挙げられている。この報告における主語は表現されていないが、天谷(2002)における「私１」が、他の人になりえたかもしれない私、他の人と入れ替わる可能性がありえた私として想定されている。一方で事例の中で「自分」･「これ」という表現によって、現在存在しているその人を指し示している。この報告の問いのテーマは、「私１」と現在存在しているその人が一致していることに対する疑問であると考えられる。また「私１」と現在の「私」という意識や現在の私の身体に関わる疑問とも言える。

天谷(2002)におけるこの自我体験の報告は、「私１」についての問いという「私」を主題とした内容であるが、その背後に心と身体と私の間の関係をどのように捉えているかという価値観が表現されてもいる。具体的には、報告の中に“この体を選んだ”、“この体と気持ちが合わさっているから”という表現が見られ、心と体を別のものとして捉え、さらに「私１」が現在のこの体の存在とは別個のものとして存在している可能性を彼（報告者）が仮定していると読み取ることもできる。

本論文では、自我体験の生起の背後に、「心と身体と私の間の関係をどのように捉えているか」という価値観が存在しているという仮説を提起する。この価値観について、本論文では哲学におけるいわゆる心身問題や永井(1991)による＜私＞の考え方といった科学的（哲学的）示唆と比べ

て、素人の子どもや青年の素朴な考え方という位置づけから議論する。このような素人の子どもや青年の素朴な考え方という立場は、心理学における一連の素朴理論研究の文脈の中に位置づけることができると考えられる。

2．心身－私観の提起

前項で述べたように、哲学の分野におけるトピックとして「心身問題」というものが存在する。「心身問題」とは「心と身体の間に存在するだろうと考えられる関係に関して、心理学者と哲学者がとっているさまざまな立場」である(ベル, 2002/2006)。ベル(2002/2006)は心身問題について、二元論の立場(心は物質でなく、心と身体を因果的に関連するものとみなす)から相互作用説、随伴現象説の2つ、一元論の立場（実際に存在するのは一つのものだけであるとみなす）から観念論と唯物論の2つをそれぞれ取りあげて説明している。以下はベル(2002/2006)がまとめたそれぞれの説の概要である。二元論の立場における第1の相互作用説では、心と身体という別個のものが2つあり、心と身体の間に双方向の影響しあう因果的関係が働いていると考える。しかし、どのようにして物理的身体が心という形而上学的な実体と相互に作用しあえるのかは問題点として残っている。二元論の立場における第2の随伴現象説では、心と呼ばれるものは脳とは別のものだが、脳から産まれた何かであると考える。心は身体（脳）によって作られたので、物体から遊離した霊や生命力を持ち出す必要はない。一方の一元論における第1の観念論とは、心という1つのものだけが存在する、つまり心的な現象だけが現実のものであり、知ることのできるものだと主張する。そして一元論における第2の唯物論とは心的事象は物質的な事象であると主張する。私達が心的な事象について語るのは、脳の物質的な課程とは別にそのような実態が存在すると誤って信じているからであると説明する。

以上の概要により心身問題に関する考え方については、哲学の分野においては少なくとも4種類の立場が見られるようである。哲学の分野において、これらの立場のうちどれがどのように支持されているかという観点から見てみると、二元論的な立場を取る者は現在の分析哲学者の中ではほぼなきに等しく、また一元論における観念論はその神秘主義的な傾向からか、現代の哲学史においてはほとんど忘れられている(水本, 2004)ようである。しかしその一方で、われわれの素朴な「心」概念は、基本的にものの世界から独立に完結した実体、というデカルトの図式をいまだに引きずっていることを水本(2004)は指摘している。渡辺(2006)は、素朴に一般の大人は“客観的物理的存在としての脳が、主観的な知覚世界を、つまり心の世界を生み出すと何となく思っている”と述べている。水本(2004)の主張によると、素人の考えは、現在の科学的（哲学的）な立場とは異なる二元論的な見方が依然残っているように捉えることができるし、渡辺(2006)の指摘は素人の大人は一元論における唯物論的な見方を“何となく”支持しているように捉えることができる。

このような「心身問題」を、日常生活においてより身近に考える切り口として、「私」という意識と関連させて捉える考え方が見られる。例えば一元論における第１の観念論の流れとよく似た考えでありながら、微妙に異なる立場(水本, 2004)として、「私」のみが存在するという「独我論」が挙げられる。この独我論的な考え方の一つとして、永井(1991)の＜私＞に関する考察が、より具体的に「心身問題」と「私」という意識の関連について表現していると考えられる。永井(1991)による＜私＞とは“その人物の持ついかなる性質とも独立に成り立つ事実である”ものである。＜私＞を説明する具体例として永井(1991)は、永井均が現実と全く同じあり方で存在しつつ、私でなくなることを想定できるとしたうえで、その瞬間、世界から私は消失するが、永井均という人物は依然として存在可能であると述べている。つまりこの状況は、永井均という人物の主観（意識）は消失していないが、＜私＞という意識は消失しているということを表現している。永井(1991)のこのような＜私＞という考え方について中島(1991)は“通常の形で生きている限り、＜私＞は「私」でもあることにより、＜私＞のみについて論じることは不可能”であると批判している。

本論文で問題としたいのは、永井(1991)による＜私＞の仮定が「正しい」か「間違っている」かという議論ではなく、＜私＞といった仮定をする発想が、心身問題と私の間の関わりを理解するバリエーションの１つとして挙げられるということである。また哲学における心身問題に関わる４つの立場の中にも、現代の哲学においてほとんど取りあげられない立場が存在してはいるようであるが、素人の子どもや大人にとっては、依然として想定されるバリエーションの１つとして挙げられることがあると考えられる。さらに水本(2004)や渡辺(2006)の指摘する素人の大人の素朴な考えも、多くの大人の「普遍的回答」として共有されているかどうかも疑問である。本論文では、心身問題と「私」という意識を関連させて考えようとする見方を、そのような見方が抽象化された形である心身問題の一つとして議論するのではなく、素人の子どもや大人に身近な形で想起されやすい形で、心身問題と「私」との関連という枠組みから議論したい。それを本論文では「心身－私観」と呼ぶこととする。「心身－私観」と呼ぶ理由として、心身問題は基本的に主たるテーマが「心」の位置づけ方なのであるが、心身問題－私観における主たるテーマは「私」の位置づけ方であるということを本論文では重視するからである。ここでいう「私」と「心」は同じ場合もあれば、永井(1991)における＜私＞と「私」のように異なるものを指す場合もある。

中島(1991)の考察にも見られるが、私達は生きている限り、＜私＞や「私１」は同時につねに「私」でもあり、両者を分けて考える考え方は多分に仮定的である。しかしその仮定が、素人の子どもや大人が世界や私というものの位置づけを理解・解釈するにあたっては、（たとえ科学的に間違っていたとしても）感覚的に納得しやすい「実用的な」考え方と捉えることもできる。

またこの心身－私観という捉え方は科学者（哲学者）であれ、素人の大人であれ、子どもであれ、世界を理解・解釈するあり方として、心身問題と比較して、自分自身の問題として考えるに

あたってより「実用的」であると考えられる。なぜなら、「私」という意識や心をどう捉えるかという観点から、心身問題を考える方がより必要性が高く、かつ問いとして成立しやすいからである。例えば、「私の意識は死んだらどうなるのか？」という問いや「私の身体とは独立して私という意識があるのだろうか？」という（心身－私観的な）問いの方が、「心は身体が消滅した場合はどうなるのか？（心と身体の関係はどうなっているのか？）」という問いや、「身体と独立して心は成立するのだろうか？」という（純粋な心身問題的な）問いよりも「私自身」の問題として想起されやすく、かつ「私の心」をどう捉えたらよいかという必要性が高く感じられるということである。

3．既存の素朴理論研究の流れの中の心身－私観

心理学において、幼児期・児童期に特徴的な認知的枠組みをこの時期に見られる大きな変換を伴う視点を主なテーマとしているものに、一連の素朴理論研究が挙げられる。素朴理論研究の下位には素朴物理学、素朴生物学、素朴言語学、素朴記号学、素朴心理学といった複数の領域が見られる(Bennet, 1993)。またその下位領域によって、対象とする年齢も（多くは幼児・児童であるが）乳児から大学生まで幅広く、研究の目的も科学理論と対比して議論するものから、素朴理論をいつ頃からどのように形成していくのかと議論するものまで多岐にわたっている。その中で本論文では素朴生物学・素朴心理学の下位領域に注目する。

素朴生物学・素朴心理学の研究の流れの中に心身－私観を位置づけるにあたり、素朴生物学や素朴心理学研究の内容、研究方法は、多くの参考となる知見を有していると考えられる。以下に素朴生物学・素朴心理学研究における内容面と研究方法の面から、心身－私観研究に援用できる点を議論する。

①扱われる内容面からの心身－私観への接近

心身－私観と内容面から関わってくる分野として、まず第1に素朴生物学に注目する。素朴生物学に関わる議論において主な論点となっているのは、(1)「生物」と「無生物」の区別、(2)心理・社会的現象と生物学的現象の区別（心と体の働きの分化）、(3)非意図的な因果的説明に関して等である(稲垣, 1995)。(1)についてはInagaki(1993) が年月の経過により動物や植物は大きくなるが無生物ではそうでないという観点から、4〜6歳児が植物を含む生物と無生物を区別しうる実験結果を見出している。つまり幼児であっても心と体の分化ができていることが明らかとなっている(稲垣,1995)。(2)についてはInagaki and Hatano(1993) が遺伝的特徴（目の色、性)、身体的特徴（痩せている、走るのが遅い)、心理的な特徴（忘れっぽい、怒りっぽい）を修正できるか否かという観点から、4〜5歳児が遺伝的特徴は修正できないが、身体的特徴と心理的特徴は変えられる場合があるという実験結果を示している。これにより、幼児の段階で既に生

物に関する知識に関して、心と体の分化の枠組みを持っていることがうかがわれるのである(稲垣, 1995)。そして(3)についてはInagaki and Hatano(1993)が幼児が臓器に行為主体的性格(agency)を割り当てて現象を理解する、例えば「息をして空気を吸い込むのはなぜか」という問いに対して「胸のところが、吸い込んだ空気から元気が出る力をとるため」という説明を行うことを示している。その後8歳児になると、大人と同じような「肺で酸素を取り入れ、いらなくなった炭酸ガスと取りかえるため」という説明を選ぶことが多くなることを見出している。以上より、6歳頃までに素朴生物学が成立し、その後、同じ生物学の中で、より科学的な生物学へと概念変化することが示唆される(稲垣, 1995)。それと同時に、その背後の認知的枠組みにおいて、「心」と「体」の分化(区別)が幼児期において既に見られることも示している。この点については丸野(1994)も、素朴生物学成立の背景に、子どもが心と体の働きを区別でき、身体内部の器官の働きが理解できることが関係していることを指摘している。

心身－私観と内容面から関わってくる分野の第2に素朴心理学の領域に注目する。素朴心理学の分野においては、いわゆる「誤信念課題」に代表される「心の理論」研究がその中心となっているが、それ以外の「心」に関する価値観に関わる研究が近年少数ではあるが出現している。例えば原(1998)は素朴心理学の流れの中で「人格についての理論」を取りあげている。原(1998)によると、素朴心理学の中心である「心の理論」で扱われる「心」とは心的状態(例えば現在どのような意図を持っているか)に焦点を当てているのに対し、「人格についての理論」は内的特性－親切・けちといった性格特性や行動特性が抽象化されたもの－に焦点を当てているところに両者の違いが見られると言う。この原(1998)の観点は、「心」を無生物と対比して捉えるだけにとどまらず、「心」をさらに心的状態と特性とを区別して捉えようとしている点で、「心の理論」とは異なる視点を有していると考えられる。つまり、「心」について「心的状態」を推測できるか否かという側面だけでなく、「心」の捉え方を階層的にとらえたものとも言える。ここから本研究における「心身」問題で焦点を当てるべき「心」で扱われる領域へ位置づけられる可能性が見えてくる。

②扱われる研究方法からの接近

(a)素人の考えを知ること、素人の考えの発達を記述する観点

素朴理論に関する研究方法の観点からは、主に2つの流れがあるように考えられる。第1の流れは、素朴理論は常に正しいとは限らず、場面や状況に応じて常に矛盾をはらんでいるものであるから(丸野, 1993)、素朴理論からどのようなプロセスを経て(修正が行われ)、科学理論を持つようになるのかといった目的を持つ流れである(例えば麻柄, 1990)。この流れの中では、素朴理論は「正しい」科学理論と比較して位置づけられている。

この第1の流れから、心身－私観に関する研究に適用できる視点を考えてみると、心身－私観

について、当初の状態からどのような「気づき」を加算しながら、科学者の提供するもしくは素人の大人の考えるいくつかの「説」に収束していくのか、発達段階ごとの心身－私観の様相を記述するという視点が見出されてくる。しかし、心身－私観に見られる問いの内容に関して、科学的（哲学的）な観点からは「どのような考え方が矛盾をはらんでいないのか」という点で決着を見ていない。したがって、大人であっても普遍的な「正答」を提供できないということが、素朴理論研究には見られない問題点として挙げられる。

そして素朴理論に関する研究方法の第２の流れは、科学理論とは異なる素人の子ども（や大人）達の持つ独自の理論を明らかにするという視点を持つものである。例えば素朴心理学の流れの一部に見られる「素朴な能力観」（唐沢・東，1992）や「発達観」（丸野，1993；中澤，杉本，中道，2004）に関する研究は、素人の大人（大学生）を対象に、素人の大人がその領域についてどのような知識をもっているかという分析を行っている。この流れは、何が真実かを求めるというよりも、素人の子どもや大人が日常生活を送る上で彼らの考え方がどれだけ有効であるかという実用的な基準で精緻化され、世界を解釈する時に利用（丸野，1994）できるかということに重点が置かれている。

この第２の流れに基づいて心身－私観研究に援用できる点を考えてみると、心身－私観について素人がどのようにとらえているかという視点から分析を行い、彼らが自分を含めた世界をどのように解釈しようとしているかを明らかにするという視点が見出されてくる。この視点においては、心身－私観について何が「真の回答か」ということは問題にならない。彼らの素朴な心身－私観が、彼らの世界観を解釈するにあたりどのように機能しているのかを明らかにすることは、今後の教育的配慮への応用につながりうると考えられる。

(b)研究における質問の手続きに関する援用の可能性

幼児期または児童期を対象とした素朴生物学の研究方法としては、主に彼らを対象とした実験室実験が行われてきた。その際の題材の提示方法としては、例えば「乳児とりかえ」が生じたという事態から、遺伝的特徴が生物学的な親と似るかどうかといった教示（Hirschfeld, 1994）や、おとぎ話の設定で、女王が羊飼いの娘を養女にして育てた場合と羊飼いの女が女王の娘を養女にして育てた場合で、背の高さや目の色などの生物学的属性やライオンの歯は32本あるという信念などの心理的属性の付与の仕方が異なるか否かといった教示文（Solomon, 1996）が挙げられる。

また哲学の分野における思考実験の一つに、ネーゲル(1974)のコウモリの思考実験の例が挙げられる。ネーゲル(1974)のコウモリの思考実験とは、「人間である私がコウモリの身になったらどんな風か」ということをテーマに、コウモリがコウモリとして、コウモリの身になって体験することに関して論じるものである。ネーゲル(1974)はこのように考えると、そのコウモリに「乗り移った」人間である私の記憶や感覚は既になくなってしまい、このようなことを考えることが

不可能であると結論づけている。しかし、素人の子どもや大人による回答はネーゲルの提出する考えにまで至っているとは考えにくく、質問する教示文のバリエーションとして使用可能であると考えられる。

以上のような素朴理論研究や哲学の分野における教示文はいずれも、ストーリーの中の主人公や「私」が、何らかの経緯により他の状況に交換させられるという仮定が共通して見られる。その上で主人公や「私」がどのような特徴を持つようになるかを想像するよう求められる。子どもや素人の大人に対し、どのような心身－私観を持っているかについて、自由に回答を求めたとしても、日常的に精緻な理論として体系立てて説明することは困難であることが想定される。素朴理論の特徴は、「これが理論」といえるような言語化可能な形で子どもの内に存在しているものでない(稲垣, 1985)からである。したがって、素朴生物学における「乳児とりかえ」や哲学におけるコウモリの思考実験の例のような場面を設定し、仮定として「私」の捉え方や「私」でなくなることについて想像してもらう手法は、子ども・大人を含めた素人の心身－私観を明らかにする上で有効であると考えられる。

③心身－私観を既存の素朴理論の文脈から捉えることの意義

(a)幼児期から青年期まで連続したモデルの提起の可能性

心理学における素朴生物学の分野における知見により、幼児期から児童期にかけて、自己と他者の間の遺伝的素質の変換不可能性が成立する(稲垣, 1985)。一方で、青年期には現実的な自己の存在価値や意味について思い悩むという段階が存在する。その間をつなぐ構成概念として、児童期における心身－私観を位置づけることができると考える。その傍証となる知見を以下に示す。

仲村(1994)は子どもの死の概念について、3歳から13歳までを対象に調査を行い、6～8歳でいったん死の現実的意味を理解するが、その後生まれ変わるという意味での「生き返れる」といった霊的精神的回答が増加するという知見を見出している。そしてこの結果から、発達に伴い、自分を含めた人間がいつかは死ぬ存在であるという自覚を持つとともに、死後の世界への思索や興味につながっていくことを示唆している。この研究は「死」の概念を検討したものであるが、小学校後半に見られる考え方が、本研究における心身－私観と、扱う領域が非常に近いと考えられる。仲村(1994)は研究で得られた霊的精神的回答の増加に仏教的な思想の存在を指摘しているが、この回答は死に対する概念だけでなく、死や死後の想像、生死と「私」の関係についての考えも含んでいるように思われる。本研究における心身－私観も、仮定として「私」が死後も存在するか、身体・記憶を持たない「私」が仮定されるか、他の人にこの「私」がなりうるかといった問題を扱っている。つまり本研究における心身－私観は、仲村(1994)における調査の中で小学校後半に見られた霊的精神的回答の背後にある説明原理を直接的に把握しようとするものと位置づけられる。

また Montemayer＆Eisen(1977) の研究では、10歳から18歳までを対象に20答法により「私」について回答を求めている。その中で、「宇宙の小さな点」、「人間」といった抽象的概念への言及が12歳頃に一旦多くなっているという結果が見出されている。この研究は素朴理論に関する研究ではないが、小学校高学年の時期に「私」を例えば宇宙という壮大なスケールと対比させて捉えるといった、いわゆる抽象的な視点から「私」を捉えることが可能になっていることをあらわしている。その中で心身－私観が形成され、彼らなりの考え方（素朴理論）の精緻化が見られたり、自己の規定の仕方がゆらいだりしている現われと捉えることもできる。

これらの知見を既存の素朴理論や青年期における自己への捉え直しの流れと合わせて考えると、まず幼児期から児童期にかけて素朴生物学が見出され、自己と他者の性質の変換不可能性を身につける。その後日常生活の中で、実際に死に直面する等の経験をしながら死を自らにもやってくるものとして位置づけるようになる。そこから自分を含めた生死に関する霊的精神的存在を仮定するようになり、魂に近い位置づけの「私」を仮定するようにもなる。この絶対的な「私」という仮定(天谷(2002)の言う「私１」や永井(1991)の言う＜私＞）が、その世代の「私自身が存在しているよりどころや確かさ」を示しているとも考えられる。そのような私を、心身との関係の中で位置づけたり、世界を再解釈したりすると考えられる。その後青年期には、そのような絶対的な「私」の存在からやや現実的な「私」に関心が移り、現実世界において生活している「私」の存在価値や私らしさを模索する方向で模索が見られるというプロセスが仮説として想定される。

この仮説は、心身－私観についての素朴理論の発生と精緻化、その他多くの種類の価値観の基礎となると考えられ、発達心理学の中で児童期における（現在は非常に乏しい知見しか見られない）自己関連の研究の一つとして位置づけることができる。また発達的に連続した「私」についての捉え方を示すモデルとして多くの可能性を持っていると考えられる。

４．自我体験の心身－私観への寄与

前項において触れた Montemayer ら(1977)や仲村(1994)の知見は、自己について、また死についての捉え方が、年齢が上がるにしたがってどのように変化していくのかを記述したものである。この知見は心身－私観の変化を間接的に示したものと前項で述べた。そのような変化のプロセスや発達の道筋を記述するという「静的な」様相の背景に、どのような変数の影響を受けてそのような状態となっているのか、また変化が見られたことによりどのような変数に影響を及ぼすのかといった「動的な」考察が、その後発達心理学的な観点からは必然的に求められてくる。またその変化のパターンに関して、どのような個人差が見られるのかといった考察についても同様である。

ここで、この心身－私観に影響を及ぼす要因、また素朴理論の変化に関する個人差に寄与している要因として、自我体験が関与してくるという仮説を提起する。自我体験を経験する人は、そ

うでない人に比べ自分自身の存在様式、つまり永遠の時空間の中での「私」といった捉え方や、現在ある個人としての「私」を越えた「私１」(「魂」や「意識」のようなもの）といった捉え方が、彼らの「素朴理論」として定着しやすい状態にあると考えられる。また日常生活において、周囲の人の生き死にの経験や、日常生活において触れる物語や言説などに含まれる生死や心身二元論的発想などを、自我体験を経ることにより自らの問題として意識的に考え、整理しやすいということが考えられる。また丸野(1994)も指摘するように、素朴理論が科学理論と同じとまでいかなくても、素朴理論の修正に関わるような「矛盾をはらんだ体験」に遭遇したり、それまでのその人の素朴理論では説明がつかなかったりする経験を通して変容していく。自我体験を経ることで、その時点における彼らの心身－私観の内容に関する戸惑いや修正といった「揺れ動き」を生み出し、その後「矛盾をはらんだ経験」として彼らの中に位置づけられるのではなかろうか。この点について高井(2004)は自我体験に関して認知的な観点からの考察を行っており、“世界と自分との関係が変換する瞬間に自我体験が経験されるのではないか”という仮説を提起している。また高石(1988)も“自我体験をどのように持つかは青年期および成人期以降の生き方に影響を及ぼす”と指摘している。

しかし心身－私観に関しては、科学的に（哲学的に）一つの「正しい」回答が存在しているわけではなく、複数の「説」が存在している。素人のしかも児童期から青年期の世代であればなおさら彼らの「理論」が彼らなりに理路整然と整理された状態で収束していることは考えにくい。しかし自我体験を経ることで、経ないことに比べて心身－私観への意識化や精緻化に対するアクセシビリティが高くなると考えられる。そして、それまで有していた心身－私観に関わる「理論」の改変や精緻化を図ろうと試行錯誤し、自我体験を経ないことよりも、彼ら自身が見出した「理論」の整理が進む（収束に近づく）方向にあるのではないだろうか。

このように本論では、心身―私観に関する素朴理論が、それに関する科学理論に変容していくというモデルを提起するのではない。それまでには存在していなかった、もしくは形を成していなかった心身－私観が、自我体験の生起によって発生もしくは変容し、科学理論に見られる複数の「説」のいずれかの一部が援用される形で彼らなりに収束に近づくというモデルを提起しているのである。

５．議論のまとめと展望

以上から本論では、心身－私観が素朴理論の中における素朴生物学や素朴心理学の文脈から捉えることのできる可能性を論じた。そして素朴理論研究で行われている実験や質問紙調査の教示文を心身－私観に関しても適用可能であることを論じた。このように心身－私観を位置づけたうえで、本論では自我体験を通して、心身－私観が変容していく可能性を仮説として提出した。つまり、それまでほとんど何の修正も行われずその人の「素朴理論」として存在していた心身－私

観が、自我体験を経ることで「揺り戻し」や「疑い」のきっかけになり、より精緻化・変容が見られることを仮定している。それは自我体験をただ経るだけでなく、より長く・もしくは深刻に考えたり、考えた経験を自ら意味づけたりすることでより強い影響が見られることが考えられる。

このような仮説を検証していくことで、児童期から青年期初期における自己や世界に対する説明原理に関しての認知発達もしくは認知的変容を実証的に記述できる可能性が期待される。心理学における児童期における「自己」研究は非常に乏しい。数少ない児童期対象の自己関連の研究は、青年期の状態と比較して、もしくは「成人」の研究と同じ枠組み（質問紙や実験等）を使用して児童期を対象としたものが多い。つまり、青年・成人に見られるような複数の下位因子が児童期にはまだ未分化であるとする研究や、青年・成人には低い得点が児童期には高い（もしくはその逆）といった視点を持つ研究が多いのである。本論文における仮説は、児童期特有に見られる自己についての枠組みを明らかにする視点を持ち、他の発達段階とは質的に異なる様相を提示できることが期待される。

Ⅱ．自我体験と素朴理論の関連についての予備的検討

1．問題と目的

本項では、Ⅰにおける議論から導かれた、素朴理論研究の方法論を援用し、心身－私観に関する複数の「説」のバリエーションを質問項目として作成し尺度化する。そして大学生を対象に自我体験の経験の有無による差、自我体験を経た者について、体験時の深刻さや意味づけによる差を予備的に検討する。

2．方法

●被験者：大学生 209名（男性 104名、女性 104名、不明 1 名、平均年齢 18.6歳（*SD*1.1））であった。講義の一部を利用して集団実施された。

●質問紙(a)「心身－私観」に関する尺度：10項目を新たに作成した。質問項目作成の観点としては、素朴理論における「乳児取りかえ」に関する教示文や哲学における思考実験の具体例を参考に、記憶・脳の機能・性格が何らかの「事故」により喪失もしくは停止・変化した場合、「自分」と同定するか否かという項目を考案した（項目 1：大変な事故に遭い、大きなショックを受けたため、それまでの記憶がなくなってしまった。それでも「自分」と言える、項目 3：自分の脳の働きが止まってしまったとしても、それは「自分」と言える、項目 4：大病になり、ある薬を投与したら、その薬によって、それまでと比べて性格が全く変わってしまった。それでも「自分」と言える。）。また「心」や「体」、「身体の機能」を失った際に「自分」と同定するか否かという項目を考案した（項目 2：自分の脳の働きが止まってしまったとしても、それは「自分」と言える、項目 9：自分自身の体さえあれば、意識がなくなったとしても「自分」と言える、項目

10：自分の身体の機能が止まってしまったら、自分の「心」も消滅する。)。さらに、生死と「私1」との関連を問う項目を考案した（項目6：自分が死んだとしても、「自分」はどこかに残っているだろう、項目7：自分は、誰か他の人の「自分」の意識を引き継いで生きている、項目8：自分の両親でない人たちからも、「自分」は生まれることができる。)。最後に心身二元論的な考えを持っているか否かについての項目を考案した(項目5：自分の心と体は別者である（分けて考えることができる)。)。これらの項目に対する評定は「どちらともいえない」を設けず6件法を設定した。

(b)自我体験尺度：天谷(2005)による自我体験に関する質問項目15項目に対する評定後（「思ったことがある」、「近いことを思ったことがある」、「何となくあったような気がする」、「思ったことがない」、「わからない」の5件法)、「思ったことがある」、「近いことを思ったことがある」に評定した項目が1つ以上存在した被調査者に対して、その項目について具体的にどのように思ったのか自由記述を求めた。さらに、自由記述に記入した被調査者に対して、体験時の深刻さをたずねる質問項目（水間(2003)による自己嫌悪感へのとらわれの項目(4項目)を本研究に沿った形で部分的に改変）に対する評定を求めた（5件法)。また自我体験を経た意味をたずねる質問項目3項目に対する評定を求めた（5件法)。この3項目の内容は「A(体験内容)を考えたことは、自分にとってよいことだったと思う」、「Aについて考えたことは、その後の自分に何らかの形で影響していると思う」、「Aを考えたことは、自分にとって何か意味があったと思う」というものであった。

●自我体験を経たか否かの分類：本研究では全被調査者を「体験群」、「あいまい群」、「誤解群」、「未体験群」の4群に分類した。「体験群」とは、質問項目において1項目以上「思ったことがある」または「近いことを思ったことがある」に評定し、さらに自由記述内容が自我体験とみなせた群である。自我体験とみなす基準は、天谷(2002)に見られる「私1」という考え方（その人の属性や身体といった諸規定から成る具体的に現在ある個人としての「私」とは独立したもの）が取り入れられた上での思考が見られること、「なぜ」という問いや感覚的違和感が含まれているこ、自発的に問いや違和感に直面していることが挙げられる（詳細は天谷(1999)参照)。そして「あいまい群」とは、質問項目では高い評定をつけたが自由記述が見られなかったり、自由記述内容が自我体験とするには不十分であったりした群である。「誤解群」とは、自我体験の内容とは全く異なった自由記述が見られた群であり、「未体験群」とは、質問項目のすべてに低い評点をつけ、かつ自由記述が見られなかった群である。以上により、「体験群」は質問項目の評定の高さだけでなく、記入された自由記述内容の観点からも検討されている。

3．結果と考察

①自我体験の分類

自我体験を経たか否かの分類については「体験群」が58名、「あいまい群」が49名、「誤解群」が43名、「未体験群」が29名、調査未協力者が30名であった。調査未協力者とは、自我体験における質問項目において高い得点を得ながら、自由記述を全く記入していない人である。以後は調査未協力者、誤解群、あいまい群を除いて分析を行う。以上の結果に基づいて、自我体験の体験率を算出すると 32.4%となった。天谷(2005)による調査結果では体験率は 47.4%となっており、本研究の体験率はこの値よりもやや低い。しかし、本研究においては調査未協力者（協力が得られれば「体験群」に分類される可能性の高い群）が多く見られることから、やや低いながらも天谷(2005)の結果と大幅には異ならないと見てよいと考えられる。

②「心身－私観」に関する尺度と自我体験の関連

(a)項目別の得点差

10項目それぞれについて、未体験群と体験群の間に評定の差が見られるかどうかについて、t検定を行い検討した(Table1)。その結果、項目 5（自分の心と体は別者である（分けて考えることができる））について有意差が見られた（t (76)=-2.97, p <.01)）。また項目 7（自分は、誰か他の人の「自分」の意識を引き継いで生きている）については有意傾向の差が見られた（t (76)=-2.00, p <.10)。いずれも未体験群よりも体験群の方が高かった。この結果は、自我体験を

Table1 心身－私観尺度の項目ごとの自我体験の有無による t検定結果

	未体験群(N=22)		体験群(N=56)			
	平均値	SD	平均値	SD	t値	有意水準
1 大変な事故に遭い、大きなショックを受けたため、それまでの記憶がなくなってしまった。それでも「自分」と言える。	4.05	(1.99)	3.77	(1.44)	.60	
2 自分の脳の働きが止まってしまったとしても、それは「自分」と言える。	3.86	(1.78)	3.64	(1.53)	.55	
3 自分の「心」さえあれば、体がなくなったとしても「自分」と言える。	3.59	(1.89)	4.23	(1.35)	-1.45	
4 大病になり、ある薬を投与したら、その薬によって、それまでと比べて性格が全く変わってしまった。それでも「自分」と言える。	3.73	(1.75)	3.52	(1.42)	.55	
5 自分の心と体は別者である(分けて考えることができる)。	2.09	(1.31)	3.21	(1.57)	-2.97	**
6 自分が死んだとしても、「自分」はどこかに残っているだろう。	3.73	(1.86)	3.62	(1.81)	.24	
7 自分は、誰か他の人の「自分」の意識を引き継いで生きている。	2.27	(1.35)	3.00	(1.49)	-2.00	+
8 自分の両親でない人たちからも、「自分」は生まれることができる。	2.59	(1.65)	2.68	(1.50)	-.23	
9 自分自身の体さえあれば、意識がなくなったとしても「自分」と言える。	3.27	(1.83)	3.00	(1.38)	.72	
10 自分の身体の機能が止まってしまったら、自分の「心」も消滅する。	3.32	(1.76)	3.16	(1.62)	.38	

＊＊：p<.01, ＋：p<.10

経ている群の方がそうでない群よりも心身二元論的な考えをより強く持ち、自分という意識の中に、先人の意識も加わっているという仏教的なもしくはユング的な「魂の共有」といった発想を持っていることを示唆している。自我体験により「私１」（現在のその人の身体や記憶から独立した「私」という意識）という発想を持つことで、身体と「心」をより分割して別個の存在として意識する傾向が強まる可能性が示された。

Table2　体験群における意味づけの高低による *t* 検定結果

項目番号	意味低(*N*=24) 平均値	*SD*	意味高(*N*=30) 平均値	*SD*	*t*値	有意水準
1	3.79	(1.35)	3.73	(1.55)	0.15	
2	3.50	(1.50)	3.70	(1.60)	-0.47	
3	3.92	(1.35)	4.47	(1.31)	-1.51	
4	3.33	(1.31)	3.70	(1.56)	-0.94	
5	2.63	(1.50)	3.70	(1.51)	-2.61	*
6	3.43	(1.83)	3.83	(1.84)	-0.78	
7	2.63	(1.41)	3.37	(1.50)	-1.87	+
8	2.29	(1.37)	3.03	(1.56)	-1.86	+
9	3.04	(1.43)	2.97	(1.40)	0.19	
10	3.25	(1.68)	3.10	(1.63)	0.33	

また体験群のみについて、意味についての３項目の得点を合計して意味下位尺度得点を算出し、平均値(10.59)により意味づけの低い群と意味づけの高い群の２群に分けた。そしてこの意味づけの２群間で「心身－私観」に関する尺度の各項目について評定の差が見られるかどうかについて、*t* 検定を行った(Table2)。その結果、項目５（自分の心と体は別者である（分けて考えることができる））について有意差が見られた（$t(52)=-2.61$, $p<.05$）。さらに項目７（自分は、誰か他の人の「自分」の意識を引き継いで生きている）、項目８（自分の両親でない人たちからも、「自分」は生まれることができる）について有意傾向の差が見られた（順に $t(52)=-1.87$, -1.86, $p<.10$）。いずれも意味を見出している群の方がそうでない群よりも得点が高かった。自我体験を経た群の中でもさらに、自身の自我体験に意味を見出した人の方が、心身二元論的な考えをより強く持つことが明らかとなった。また有意傾向ではあるが、項目７や項目８の２項目については、得点が高いほど「魂の循環モデル」（やまだ・加藤，2001）に近い考え方をより強く持っていると仮定される。自身の自我体験に意味を見出した人の方が、そうでない人よりも「私」については「魂の循環モデル」に近い考え方をより強く持っているようである。仲村(1994)では、日本人の子どもが「死」に対する生まれ変わり思想を小学校の学年があがるに従いより強く持つようになる点について、仏教思想の影響とまで言わないまでも日常化、民族化した水準での宗教意識が漠然とした形で影響を及ぼしていると指摘している。大学生についても、自我体験を経たか経ないかによってこの意識に差が見られることが本研究により示されたと言える。

（b）因子分析

「心身－私観」に関する質問項目10項目について、より少数の因子にまとめるため探索的因子分析を行った（主因子法、プロマックス回転）。本研究では理論的には4つのまとまりを仮定したが、この項における因子分析は今後新たな項目を考案し追加する指標としての位置づけとして行った。その結果、固有値（減衰状況は3.04、1.60、1.28、0.92、0.72、0.67・・・）が1以上であり、かつ累積寄与率が50%を越える部分から因子数を3と決定した（累積寄与率59.22%、Table3参照）。

Table3　心身ー私観尺度因子分析結果

		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	共通性
2	自分の脳の働きが止まってしまったとしても、それは「自分」と言える	**.802**	-.046	.043	.50
1	大変な事故に遭い、大きなショックを受けたため、それまでの記憶がなくなってしまった。それでも「自分」と言える	**.799**	-.057	-.055	.51
4	大病になり、ある薬を投与したら、その薬によって、それまでと比べて性格が全く変わってしまった。それでも「自分」と言える	**.670**	-.026	.069	.38
9	自分自身の体さえあれば、意識がなくなったとしても「自分」と言える	**.505**	.078	.048	.25
6	自分が死んだとしても、「自分」はどこかに残っているだろう	-.020	**.714**	.053	.33
7	自分は、誰か他の人の「自分」の意識を引き継いで生きている	-.071	**.686**	.262	.31
3	自分の「心」さえあれば、体がなくなったとしても「自分」と言える	**.359**	**.395**	.012	.35
10	自分の身体の機能が止まってしまったら、自分の「心」も消滅する	-.030	-.433	**.499**	.22
8	自分の両親でない人たちからも、「自分」は生まれることができる	.123	.093	**.470**	.15
5	自分の心と体は別者である(分けて考えることができる)	-.035	.268	**.356**	.15
	寄与率(%)	30.42	16.02	12.78	
	累積寄与率(%)	30.42	46.44	59.22	
	α	.783	.629	.343	
	因子間相関　Ⅰ				
	Ⅱ	.37			
	Ⅲ	-.12	-.06		

固有値：3.04, 1.60, 1.28, 0.92, 0.72

第1因子は「自分の脳の働きが止まってしまったとしても、それは「自分」と言える」等の4項目からなり、脳の働きや記憶喪失、性格の変容、意識の喪失が見られても「自分」と規定できるか否かを問うものであり、「身体優位の自己規定」と命名された。この4項目にてクロンバックのα係数を算出したところ.78となり、十分高い値が得られた。第2因子は「自分が死んだと

しても、「自分」はどこかに残っているだろう」等の３項目からなり、身体のない意識のみの「自分」を考えることができるか否かを問うものであり、「意識優位の自己規定」と命名された。この３項目にてクロンバックのα係数を算出したところ .63 となり、ある程度の信頼性を確保できたと考えられる。第３因子については３項目からなっているが、この３項目にてクロンバックのα係数を算出したところ、.34 と低い値を示し、かつうち２項目は共通性が .15 と低いので、１つの因子として扱うことが困難であると考えられた。本研究における因子分析は今後新たな項目を考案し追加するための指標としての位置づけでもあることから、今後第３因子に含まれる項目を新たに追加し、１つの因子として扱う可能性を残すこととした。したがって本研究においては以後、第１因子と第２因子のみについてさらなる分析を行うこととする。

（ｃ）自我体験との関連

「心身－私観」に関する質問項目10項目における因子分析結果のうち、第１因子に相当する４項目と第２因子に相当する３項目の得点をそれぞれ合計し、「身体優位の自己規定」下位尺度、「意識優位の自己規定」下位尺度とした。そしてこの２つの下位尺度得点について、「未体験群」と「体験群」の間で差が見られるかどうかを *t* 検定を行い検討した(Table4)。その結果、いずれの下位尺度についても有意差は見出されなかった。

Table4　自我体験の有無による心身－私観下位尺度得点に関する *t* 検定結果

	未体験群		体験群			
	平均値	*SD*	平均値	*SD*	*t* 値	有意水準
身体優位の自己規定	14.91	(6.68)	13.93	(4.50)	0.63	n.s
意識優位の自己規定	9.59	(3.78)	10.82	(3.70)	-1.31	n.s

Table5　深さ×意味ごとの心身－私観下位尺度の平均値と２要因分散分析結果

深さ	深刻		深刻でない		深さ	意味	交互作用
意味	意味高	意味低	意味高	意味低	*F*値	*F*値	*F*値
身体優位の自己規定	11.57	8.33	11.89	10.41	4.6 *	1.52	1.01
	(4.34)	(2.25)	(3.22)	(3.39)			
意識優位の自己規定	18.68	17.00	19.56	19.42	1.09	4.24 *	0.59
	(3.77)	(5.50)	(5.88)	(3.99)			

注. 上段は平均値、下段は *SD*, *：p<.05

また「体験群」のみについて体験時の深刻さ得点を平均値(14.97)よりも高い群と低い群に分け、体験を経た意味得点の高低の２群と合わせて、「身体優位の自己規定」、「意識優位の自己規定」下位尺度について、２(深刻さ高低)×2(意味高低) の２要因分散分析を行った。その結果(Table5)、「身体優位の自己規定」下位尺度については「深さ」についての主効果が見られ（F(1,50)=4.60, p<.05)。また「意識優位の自己規定」下位尺度については「意味」についての主

効果が見られた（$F(1,49)=4.24$, $p<.05$）。「身体優位の自己規定」については自我体験の内容を深刻に考えている方がそうでないよりも有意に低い結果となり、「意識優位の自己規定」については、自身の自我体験に意味を見出している方がそうでないよりも有意に高い結果となった。

以上の結果により、大学生については、自我体験を経ているかそうでないかによって、心身－私観の下位尺度得点に違いは見られないが、同じ自我体験を経ている人の中で深刻に考える人は身体や記憶に変化が見られた場合の自己規定は弱くなることが示された。つまり自我体験を深刻に考えた人は、自分自身の現在の記憶や性格が連続性を保った状態であることが自己を規定している重要な部分であると捉えていると考えられる。自我体験を深刻に考えるという状態は、「私１」という想定のなかに、現在の身体や諸属性とは離れた独立した意識（魂のようなもの）を仮定していながらも、実際は現在の脳の働きや記憶・性格を保ちながら思考実験を繰り返している可能性が考えられる。また同じ自我体験を経ている人の中でも自分自身の自我体験に意味を見出している人は、自分の身体の消滅後も自分自身の「心」とも呼ばれるものが存在するという考えをより強く持っていることが示された。この「意識優位の自己規定」下位尺度の内容は、自我体験によって仮定的に想定される「私１」の考え方がより具体的に反映されているものともいえ、自身の自我体験の意味を見出すことが、このような考えをより明確に持つことに対してより強い影響力を持つようである。

４．予備的検討における知見から

本研究における予備調査結果から、心身－私観尺度に２つの下位尺度が見いだされ、それらが自我体験の経験の有無ではなく、自我体験を経る際の深刻さやその後の意味づけと関連していることが示された。しかし問題点も残された。心身－私観に関する哲学的な立場のバリエーションの多さから考えると、本研究で取り上げた項目群はいまだバリエーションが少ない。できるだけ平易な言い回しで、より多くの項目のバリエーションを追加する必要がある。また新たに追加すべき因子として、時空を超えて「意識」または「心」の実在可能性や、仏教的な「生まれ変わり」または「たましいの循環モデル」（やまだ・加藤，2001）等の概念が挙げられる。因子分析の結果、これらの概念を反映した項目数は少なく、共通性も低かった。これらの概念を背景とした平易な言い回しの質問項目を新たに追加し、本研究における第３因子以後の項目として構成していく必要性が示唆される。

また今後の課題として、本研究で作成した尺度に含まれる項目以外にも「（大人には見られない）子ども特有の」考え方のバリエーションも見られる可能性がある。小学校高学年生や中学生の人間観の発達（もしくは変化）を理論的に踏まえながら、この領域における項目追加を考える必要性がある。

＜文献＞

天谷祐子　1999　面接法による自我体験の調査方法について　名古屋大学教育学部紀要(心理学), 46, 276-274.

天谷祐子　2002 「私」への「なぜ」という問いについて：面接法による自我体験の報告から　発達心理学研究, 13, 221-231.

天谷祐子　2004　質問紙法による「私」への「なぜ」という問い－自我体験－の検討　発達心理学研究, 15, 356-365.

天谷祐子　2004　自我体験に関する縦断面接調査－3年後の報告－　名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(心理発達科学), 51, 51-62.

天谷祐子　2005　自己意識と自我体験―「私」への「なぜ」という問い―の関連　パーソナリティ研究, 13, 197-207.

Bell, A.　2002/2006　論争の中の心理学（渡辺恒夫・小松栄一(訳)）　新曜社

Bennett, M(Ed)　1993 *The Child as Psychologist: An Introduction to The Development of Social Cognition.* Harvester Wheatsheaf. 二宮克美・渡辺弥生・子安増生・首藤敏元(訳) 子どもは心理学者－心の理論の発達心理学, 福村出版

原孝成　1998　子どもの他者理解と素朴心理学における“人格についての理論（Theory of Personality)”九州龍谷短期大学紀要, 44, 55-66.

Hirschfeld, L. A. 1994　In the acquisition of social categories based on domain-specific competence or on knowledge transfer？ In L. A. Hirschfeld & S. A. Gelman (Eds.) 1994 *Mapping in the mind: Domain specificity in cognition and culture.* Cambridge: Cambridge University Press.

Hirschfeld,L.A.　1995　Do children have a theory of race？ *Cognition,* 54, 209-252.

Inagaki,K. 1993　Young children's differentiation of plants from nonliving things in terms of growth. Paper presented at the meeting of the Society for Research in Child Development, New Orleans.

稲垣佳代子　1995　幼児の素朴生物学の獲得をめぐる研究の10年(Pp.235-258)　児童心理学の進歩, 34, 金子書房

Inagaki, K & Hatano, G 1993 Young children's understanding of the mind-body distinction. *Child Development,* 64, 1534-1549.

唐沢真弓・東洋　1992　知能の日常的概念の発達的研究,　日本心理学会第56回大会, 85.

麻柄啓一　1990　誤った知識の組替えに関する一研究　教育心理学研究, 38, 455－461.

丸野俊一　1993　大学生がイメージしている素朴な発達曲線　九州大学教育学部紀要(教育心理学部門), 38, 97-107.

丸野俊一　1994　素朴理論(Pp.91-116)　児童心理学の進歩, 33, 金子書房

水間玲子　2003　自己嫌悪感と自己形成の関係について－自己嫌悪感場面で喚起される自己変容の志向に注目して　教育心理学研究, 51, 43-53.

水本正晴　2004　第3章　心の哲学－概念分析と形而上学(Pp.117－198) 石川幹人・渡辺恒夫(編著)2004 入門・マインドサイエンスの思想－心の科学をめぐる現代哲学の論争　新曜社

Montemayer, R. & Eisen, M. 1977 The development of self-conceptions from childhood to adolescence. *Developmental Psychology,* 13, 314-319.

永井均　1991　＜魂＞に対する態度　勁草書房

Nagel, T.　1974/1989　コウモリであるとはどのようなことか(永井均訳)　勁草書房

中島聡　1991　＜私＞の射程　イマーゴ, 1991年6月号, 66－73.　青土社

仲村照子　1994　子どもの死の概念　発達心理学研究, 5, 61-71.

中澤潤・杉本直子・中道圭人　2004　イメージ画に見られる学生の素朴発達観　千葉大学教育実践研究, 11, 149-163.

Solomon, G., Johnson, S., Zaitchik, D.& Carey, S. 1996 Like father, like son: Young children's understanding of how and why offsprings resemble their parents. *Child Development,* 67, 151-171.

高石恭子　1988　青年期の自我発達と自我体験について　京都大学教育学部紀要,　34, 210-220.

渡辺恒夫　2006　訳者あとがき（Pp.219-222）Bell, A. 2002/2006　論争の中の心理学（渡辺恒夫・小松栄一訳）　新曜社

やまだようこ・加藤義信　2001 たましいのイメージと生命の循環世界観－日本とフランス青年の描画による民間表象の心理学モデル　京都大学大学院教育学研究科紀要, 47, 1-27.